

子どもの社会性と年中行事

— 奄美大島大和村の豊年祭の事例から —

石川 雅信

明治大学 教授

はじめに

子ども達に基本的な生活習慣・態度が身につけていないという事をしばしば耳にする。たとえば日常の挨拶ができない、集団行動が苦手、授業中、決められた席に座ってられず歩き回ってしまう、私語が止まらない等々である。本来、対人関係や集団における規範、広義の社会性といったものは家族、地域、学校等の日常生活の場で自然に身につけていくものだった。今、子ども達が成育の過程でこうした行動様式や資質を身につける機会が得にくくなっているのである。

子どもをめぐる生活の変化は様々な側面で急速に進んできた。とりわけ1960年代の高度経済成長期を境に子どもの生活は大きく変わった。その変化の様相は個人化(individualization)の過程とみていだろうか。個人化とは一人一人の独自性が尊重されること、「自分自身になること」を指し、個性化とも呼ばれる。それ自体、否定的な意味をもつものではないが、行き過ぎれば社会的な規範を軽視することにもつながる。現代の子ども達は往々にして自らの行動を周囲の状況に合わせて生活することに慣れていない。

都市化、産業化が進み、野原や路地、雑木林など、住居の周りの子どもの遊び場が消え

ていった。反対に、テレビが普及し、そのおよそ20年後には電子ゲームが人気となり、子ども達の居場所は屋外から屋内に、また集団での遊びから一人遊びに移行していった。さらにインターネット、携帯電話、携帯メール、携帯電子ゲームなどの普及は子ども達の生活をさらに個人化していった。交友関係もインターネットなどを通じた間接的なものに比重が移っていく。子どもたちが直接集まって、仲間同士で関わりあう機会は格段に減った。

とはいえ、あらゆる地域の子どもの生活から、親密な人間関係が失われてしまったわけではない。たとえば沖縄県や鹿児島県奄美群島などの離島地域では、伝統的な行事を通じて子ども達が生き生きとした交友や地域社会との結びつきを維持している例を見出すことができる。以下では鹿児島県奄美大島の事例から子どもの社会性を育てる契機としての年中行事の機能について考察する。

1 大和村の概況

筆者は本研究紀要第36号で奄美大島における子育てのあり方についてとりあげた⁽¹⁾。奄美大島では子育ての負担を母親だけに負わせることなく、夫婦が協力し、地域社会、公的機関が連携しながら支えあう志向が強く、こ

のことがこの地域の高い出生率と密接に関連していると考えた。また、子ども達の周囲には家族、親族、地域、学校それぞれのレベルの緊密な人間関係があり、この関係は年間を通じて折々の時節に行われる様々な行事の実践によって強化されていることを指摘した⁽²⁾。

それでは実際に、どのように年中行事が実践され、子どもたちは行事にどのように参加するのだろうか。今回、奄美大島大和村大和浜集落の十五夜祭り（豊年祭）を参与観察する機会を得た。ここで得られた資料を基に考察を進めることにする⁽³⁾。

大和村は奄美大島の中部東シナ海に面する人口1,711人（2011年11月1日現在：村広報）の自治体である。行政的には大島郡に属する。高齢化率は34.6パーセント（2011年10月1日現在：鹿児島県年齢別推計調査）、農業地域でスモモの栽培に力を入れているが、若年層の働き口が少なく、人口減少の激しい過疎地域である。一方で伝統的にユイあるいはユイワクと呼ばれる労働交換の習慣があり、村および集落内での互助協働の意識が強く、年中行事をはじめ様々な行事、祭事が年間を通じて行われている。

村は11の集落からなる。集落の世帯数は最大の大棚（おおだな）集落の161世帯、最小は志戸堪（しどかん）集落の7世帯、平均ではおよそ90世帯である。大和浜集落は人口287人、132世帯（2011年10月31日現在：村住民税務課統計）からなる村内第二の人口規模の集落である。古くから港が開かれ、奄美大島全体に道路が通じる以前には、大和村の海の玄関としての役割を担っていた。現在の村役場も大和浜集落内にあり、行政的にも文化・歴史的にも村の中心的な位置を占めてきた地域である。

大和村で集落ごとに行われる豊年祭は二つの時期にわかれて開催される。一つは旧暦の8月15日に行われる八月十五夜である。大和浜をはじめ7つの集落が8月15日に豊年祭を行う。もう一方のグループは旧暦9月9日に行う。こちらはクガツクンチと呼ばれている⁽⁴⁾。

2 大和浜(やまとはま)集落の十五夜・豊年祭

奄美大島では一年を通じて数多くの年中行事が行われるが豊年祭はその中でも最大の行事である。農業社会における収穫と播種の境に行われる祭りで、豊作と集落の一年の無事を祈る意味をもつ。基本的には集落内のすべての世帯の参加が求められ、かつては祭りの準備や必要な食物、薪などの燃料も各戸から均等に集められ、年齢、性別によって種々の役割が割り振られた。高齢化が進んだ現在では祭りへの寄付という形で金銭が集められている。

2011年の祭りは新暦9月11日(日)に行われた。旧暦の8月15日は実際には新暦の9月12日であったが、近年は集落外の人たちが参加しやすいように、旧8月15日に近い日曜日に行われている。祭り当日に行われる行事の内容は次の①～⑤である。

①豊年祈願の儀礼

奄美大島における八月十五夜は個人的に家族単位で行う月見の行事ではなく、集落全体で行う豊作祈願と一年の無事を祈る行事である。祭り当日、奉納相撲を始める前に行われる儀礼は、集落の神役の家で行われるガンノーシ（願直し・昨年に立てた「願」を解くこと）とガンタテ（願立て・新たにこれからの一年の「願」をたてること）、集落の聖地であ

る泉で行う安全祈願、それに隣接する思勝（おんがち）集落にある高千穂神社での祈願などである。相撲を行う力士は、小学生以下の幼児から壮青年団までまわし姿でこれらの儀礼に立ち会う。それぞれの儀礼の場所へは決められた道順で行列して移動する。この行列をフリダシと呼ぶ。「イヤー、ヨイヤー、ヨイヤー」の掛け声や太鼓、ホラ貝の音とともに行列する。この行列には集落の邪気を払う意味があるという。行列に並ぶ順序は年齢や役割によって定められている。

②奉納相撲

豊年祭の中心となる行事は集落の土俵で行われる相撲の対戦である。参加するのは幼児から50歳代までの男子で、集落の男子ばかりでなく、他集落や、大和浜出身で他地域に住む人達が出場することもある。女性は土俵に上がってはならない。取り組みは幼児、児童などから年齢順に行われ、個人戦、団体戦、集落対抗戦、親子兄弟戦などの対戦が組まれる。その年に初めて土俵に上がる男の子に化粧まわしを付けて土俵を踏ませる儀式なども行われる。集落の一員としてのお披露目の意味をもつ。

好成绩をおさめた者には賞金賞品が用意され、特定の取り組みに懸賞金がかけられることもあるという。

奄美大島は相撲が盛んな土地柄だが、これは集落の行事としての意味合いが強い。どここの豊年祭の相撲でも白熱した対戦がくりひろげられるという。奄美大島出身の男性の多くはまわしを締めて土俵で相撲をとった経験があり、大和村在住の男性の多くは自分専用のまわしを持っているという。

祭りの日が近付くと日時を決めて練習を行

い、年長の指導者が年少者たちに稽古をつける。相撲は身体がぶつかりあう激しい競技であるため、けがをしないように厳しく指導される。祭りの前々日には、稽古の後、集落から参加者に焼き肉などがふるまわれ、子どもたちと壮青年団の大人たちとの交流の場もなっていた。

③ナカイリ

相撲の取り組みの半ばになると、仮装した女性たちの行列が歌い踊りながら握り飯やサトイモ、魚やトリのカラアゲなどの食物を盆にいれ、頭の上に掲げて土俵の周りに運んでくる。これをナカイリという。運ばれてきた食物は第一には力士たちのためのものであるが、土俵のまわりの観衆にもふるまわれる。握り飯はチカラウバンと呼ばれ、これを食べると力が出る、妊婦が食べると安産になる、元気な子どもが生まれるなどの言い伝えがある。また、この時間に女性たちの歌や踊りなどの余興が披露される。ここで滑稽な姿形をするなどして座を盛り上げることは邪気を払う事につながると信じられていて、ナカイリは豊年祭における女性の活躍の場となっている。

近年、集落の人口減少が激しく、相撲の対戦の数も減ったため、豊年祭の進行が相撲だけでは難しくなり、対戦の間に行われる余興や芸能の数が多くなっている⁽⁵⁾。

④棒踊りの披露

棒踊りの披露は大和村のなかでは大和浜集落のみで行われる行事である。棒踊りは武術をもとにした舞踏であるが、大和浜での起源は明治35年に大和浜出身の井原甚四郎という人物が若者の士気の高揚と規律保持のために伝授したと伝えられている⁽⁶⁾。舞踏は三部からなり、第一部は六尺棒、第二部は六尺棒と

三尺棒、第三部は鎌と薙刀を使って踊る。白の鉢巻き、赤青のたすき、手甲脚絆に草鞋といった装束で、「君が代」、「霧島」、「白帆」の歌に合わせて踊る。大和浜では中学生になると男子は青年団、壮年団のメンバーとともに棒踊り隊の一員になる。集落での加入儀礼の意味も持っている。2011年の十五夜では中学生から47歳の壮年団員までの16人が踊った。四人が一組になり、檜の木でできた棒を激しく打ち合わせて危険も伴うので相当の練習を要する。踊りのメンバーは数週間前から土俵の周りに集まって練習を行う。経験の浅い中学生たちは、高校生や青年団の年長者に指導を受ける。また、その練習には子どもたちや年配の高齢者も観衆として加わり、日没後の時間を過ごす。年配者からは踊りの所作や棒の持ち方、振り方などに指導の声がかかる。

⑤八月踊り

八月踊りは奄美群島の旧暦8月に行われるアラセチ、シバサシ、ドンガという3つの祭り（総称してミハチガチという・いずれも豊作祈願と祖先祭祀に関わる祭り）や十五夜などの行事の折りに踊られるもので、それまでの一年の収穫と平穏に感謝し、これから始まる次の一年の豊饒と無事を祈る意味をもつという。十五夜の奉納相撲終了後に集落全員が参加して八月踊りが踊られる。八月踊りの踊り始めは盆の時で、これをウチハジメといい、盆からシバサシまでの間の踊りは八月踊りの練習にあたりアシナレと呼ばれる。かつて、八月踊りはヤーマワリ、あるいはヤースキといって、集落の全ての家で、一軒一軒順次踊り回ったものであったが、人口の減少に伴って簡略化されるようになり、集落の中の数ヶ所、決められた場所で踊るようになった。八

月踊りの歌詞は方言であるため、若い世代には理解できない者が多く、八月踊りは衰退する一方であった。しかし、最近になって、この状況に危機感を感じた青年団らが中心になって、昔ながらの踊りを知っている高齢者から踊り方を習ったり、歌詞を聞き取り記録するなどの活動を始め、八月踊りの保存に力をいれるようになった。

考察

豊年祭りへの参加の経験は、子ども達にとってどのような意味があるのだろうか。以下に考えてみたい。集落における行事への参加は、個人の主体的な選択というよりも、集落からの有形無形の要請によってなされる。実際には多くの子ども達は豊年祭りの相撲や棒踊りを楽しみにしているのであるが、集落内の付き合いや協力という観点からすれば、参加してもしなくても自由というものではない。相撲も棒踊りも老人会を招いて披露する形で行われるので、参加の仕方が集落内での評価につながる。熱心に行事に参加することで子ども達は集落や年長者からの承認あるいは支持を得ることができる。

種々の儀礼への参加は、集落が伝統的に保ってきた価値観を学ぶ場となる。大和浜集落には神聖な泉、道、祭司を行う家、宗教的に立ち入りが禁じられている場所など、様々な言い伝えがある。集落内のそれぞれの場所への意味付けを知ることが郷土への愛着にもつながる。また、儀礼への参加は年齢に応じた役割の推移を認知する場であり、加入儀礼の意味も持つ。①のフリダシの行列で、小学生低学年の時にはいちばん後ろの方にならんでいたものが、学年が進むに従って、前の方へ、

さらにそれは青年団、壮年団へつながり、ホラ貝を吹く役、泉の水を運ぶ役、太鼓をたたく役など主要な役割へと進んでいく。それは集落内での社会的な位置の推移を象徴している。

②の相撲の練習、③のナカイレの準備、④の棒踊りの練習、⑤の八月踊りのアシナレはいずれも子ども達が異なる年齢の者と共同で、直接身体を使って活動する場を提供する。そこには年長者の指導のもとに一定の規律が求められる。またそれは伝統文化を学習、継承する過程でもある。

半世紀以上にわたって、世界中の子ども達の写真を撮り続けている写真家・田沼武能は、1970年代の後半、日本の子どもを撮ろうとして、街で子どもの遊ぶ姿が見られないことに気づいたという⁽⁷⁾。田沼が地域文化の中で元気に遊ぶ子ども達を探すなかで見つけ出したのが「子ども組」だったという。「子ども組」とは第二次世界大戦前にあった集落の年齢集団で、7歳くらいから若者組や娘組に入る前の14、5歳くらいまでの子どもで組織された。小正月、七夕、盆、十五夜などの年中行事や祭礼の折りに随時組織され、その中の最年長者によって統率され、年齢順にタテ割りの集団をつくり行事や祭礼をとりしきった。子どもたちはこのタテ割りの集団の中で、家や学校では教えられない社会のルールを身につけた。う。「子ども組」は、戦後は「子ども会」に名をかえて、徐々に祭りをとりしきる主体性は失われていったが、それでも地域によってはかつての「子ども組」の活動が残された。田沼はそれをレンズにおさめたのである。田沼は、現代の子ども達に欠けていることとして、仲間と遊ぶこと、それもタテ割り年齢の仲間と遊ぶことをあげ、その舞台とし

ての年中行事や祭礼の大切さを写真を通して主張している。

大和浜の事例では子ども組に相当するような年齢集団はみられなかったが、子ども達が年中行事において集団の規律の中で活動する場面が見られた。行事への参加が十分に集落の成員としての社会性を身に付ける機会になっていると考えられる。

一般に兄弟姉妹の数が減り、個室、孤食が当たり前になり、個人化の傾向が強まっている現代の子ども達は、集団の圧力の中で自らの行動様式を選択する経験が少ない。現在、衰退する傾向にある年中行事や儀礼的慣行を見なおし、生活の中に生かすことは、子ども達の基本的な生活習慣・態度を身に付け、社会性を育むうえで有効な手段であると考えられる。

〈注〉

- (1) 石川雅信 2007年「子育てを孤立化させない社会—鹿児島県奄美群島の事例—」『研究紀要第36号』pp.25-30 財団法人日本教材文化研究財団
- (2) 石川雅信 前掲書p30
- (3) 調査は2011年9月7～12日に行った。大和村大和浜集落の八月十五夜は2011年8月11日に行われた。
- (4) 大和村11集落のうち、今里、志戸堪、戸円、大金久、大柵、大和浜、津名久が旧暦8月15日に、名音、思勝、湯湾釜、国直が旧暦9月9日に豊年祭を行っている。
- (5) 大和村総務企画課編 2011年 『広報 やまと 218号 — 特集 絆を深める伝統行事～十五夜豊年祭・クガツクンチ～ 218号』 p.8 大和村
- (6) 大和村総務企画課編 前掲書 p.3
- (7) 田沼武能 2009年 『子ども組—伝統祭事の主役たち—』 p.148 新日本出版社